

「うんだなあ。そういわれりゃな」と武兵衛は孤にだまされ
たような気持になった。武兵衛は百姓熱心な人だけにがっかりし
たらしい。

その日はそれですんだが、二、三日あと、伝三郎どんの麦も弥
平どんの家でも喰っちゃと騒ぎは大きくなった。村びとたちは寄
合をもつことになった。どこの家でも馬一匹だって外に出さねい
のに。

寄合の「きめ」で夜番をすることになった。二人一組で、今夜
は与三郎と孫右工門、宵のうちにはさほどでなかったが、昼の疲れ
れがでたのか、「うと、うと」とした。

明け方、「がさ、がさ」という音に眼をさました。とおくの方
に白と黒の二頭の馬がいるのではないか。

息をこらしながら近くに寄ると、馬は遠くに見える。明け方近
く馬はお寺の森の方へゆくではないか。なおも二人は馬を追っか
けてみると馬は観音堂の中へ消えた。

まさか神馬が麦を喰ったなどは。二人はたまげて顔を見合せた。

たしかに神馬の口には麦の葉っぱがついていたそうだ。

与三郎と孫右工門はこのことを村びとたちに話した。村の寄合
では麦を喰っちゃんではと神馬にませ木をかけることにしたとい
う。そのあとは麦は喰われなかったそうだ。

ませ木とは馬小屋の入口にかける横木をいう。

時鳥と兄弟

昔々兄弟二人が山に住んでいたんだと。そして兄んやの方は我
がまま勝手の気持だったというだない。兄は外に行っているいろ
仕事はしてくれっけど家の中の事はおかまいなし、家の中の掃除
とまかないはすべて弟の役割だったんだと。

ある時の夕食、弟は兄んやのために特別にうまいご馳走をこし
らえて兄んやに「早くおあがり、おいしくできたから」と兄さん
に食べさせたんだと。兄さんはおうこれはうまいと全部食べてし
まい「いまま少ないか、お前は俺のいない間になんぼか腹いっぱい
食べたんだべ」といったんだと。弟は「いや、そんなことはない
い私は兄さんに食べてもらおうと思っ少しか食べていない」
といったんだと。兄は「いや、そんな事はない。きっとお前は腹
いっぱい食ったに違いない。そんなにいい訳をするなら、お前
の腹を裂いて見よう」という事で弟の腹を裂いて見たんだと。そ
うしたら本当に何も食べてなかったんだと。弟は兄さん思いたっ
たので、兄さんにばかりおいしいものを食べさせていたんだと。
兄さんは、弟の腹を切っては見たものの「あーこれは悪かった」
と思ったんだべない、時鳥になって飛び出し「ぼっと、ぶっざけ
た。ぼっと、ぶっざけた」と飛んで行ったんだと。その時、弟
は死んでしまったし兄の方は時鳥になって自分が悪い事をした、これま
でに弟が自分に尽してくれたのに、弟を疑って悪い事をしてしまっ
た。自分では本当にすまないと思っ時鳥になったんだと。そして、そ
の罪ほろぼしに一日八千八声鳴かなくてはなんねんだと。